

目的 被服圧は、被服の着心地や快適性を評価する感覚計測の重要な因子の一つである。被服圧の快適値や許容値は、着用者の年齢および健康状態や活動状態により変化することは推定できるが拘束方法によっても変化することが考えられる。著者は先に持続的拘束方法と断続的拘束方法を用いて皮膚温への影響を検討し興味ある知見を得た。そこで、本研究においては、断続的拘束方法の拘束の時間間隔を変化した場合について拘束時の皮膚温への影響についてさらに検討した。

方法 被験者は健康な成人女子5名を用い、左前腕部を拘束部位とした。拘束圧は著者の先の実験結果を考慮し、0.30,40,50mmHgとし、血压測定用加圧布を使用して拘束した。拘束方法は、断続的拘束方法として拘束時間の10分間を10秒、30秒、60秒間隔に拘束を与える方法と10分間持続して拘束を与える方法をとった。拘束時の身体的影響については、末梢部皮膚温として左右手指皮膚温を、さらに身体8部位の皮膚温も同時に測定し検討した。

結果 持続的拘束時と比較して断続的拘束時では拘束末梢部の皮膚温低下量が著しく少なかった。断続的拘束時の中でも10秒断続、30秒断続の方が60秒断続より拘束末梢部の皮膚温低下量が少なく、拘束方法によって同一拘束圧においても身体への影響の異なることが明かとなった。非拘束側末梢部皮膚温および8部位の皮膚温は、本実験の圧力レベルではほとんど拘束の影響を受けないことがわかった。